

白山紀行

—ふくいからの参詣記録—



福井県文書館 閲覧室展示
2006 Annual Renewal

白山は、古くからこれを仰ぎみる広範な地域の人びとの信仰の対象とされ、越前・加賀・美濃からそれぞれ修行のための登山路(禅定道)が開かれました。これを支える中心となったのは白山麓の人びとです。かれらは時には対立しながらも政治的な支配領域をこえて密接なつながりをもっていました。

江戸時代半ばを過ぎると、白山とその周囲は、一般の人びとの参詣や湯治のための場ともなっています。泰澄が開いたと伝えられる平泉寺から市ノ瀬にいたる越前禅定道は、その行程の険しさからかむしろ避けられ、勝山から北谷を通り、谷峠や小原峠を越えて市ノ瀬の温泉、白山山頂にいたる道が利用されました。ここではこうした白山への参詣登山の広がりの中、1830年代に相次いで書かれた福井藩士の紀行を紹介します。



『方言修行金草鞋』第19編白山参詣より
国文学研究資料館所蔵

ふくいからの主な白山参詣記録

- 井上翼章(福井藩士)「越前国名蹟考」1815年(文化12) 松平文庫 福井県立図書館保管
- 加賀成教(福井藩士)「白山全上記」1830年(文政13) 西尾市岩瀬文庫所蔵 X0015-00049
- 白玉呉竹斎光美(武沢光美、福井藩士)「白山道の葉」1831年(天保2) 国立国会図書館所蔵
- 高田保浄(福井藩士)「続白山紀行」1833年(天保4) 国文学研究資料館所蔵 X0145-00001, 00002
- 同上「続白山紀行」1833年(天保4) 山内秋郎家文書 福井県文書館所蔵 X0142-00297
- (鰐淵三九郎)「白山参道日記」1835年(天保6) 高椋節夫家文書 福井県文書館複製所蔵 C0027-00226-002
- 勝山千百里「白山紀行」1888年(明治21) 『福井新報』1888年8月6-9日、11日、14日、15日、17日、18日

福井県文書館

〒918-8113 福井県福井市下馬51-11
Tel:0776(33)8890 Fax:0776(33)8891

- 開館時間 午前9時～午後5時まで
(閲覧申込は4時30分まで)
- 休館日 月曜日(国民の祝日は除く)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日は除く)
清掃整理日(12月以外の第4木曜日・祝日の場合翌日)
年末年始(12月28日～1月4日)
文書等点検期間(年間10日以内)



白山を望む

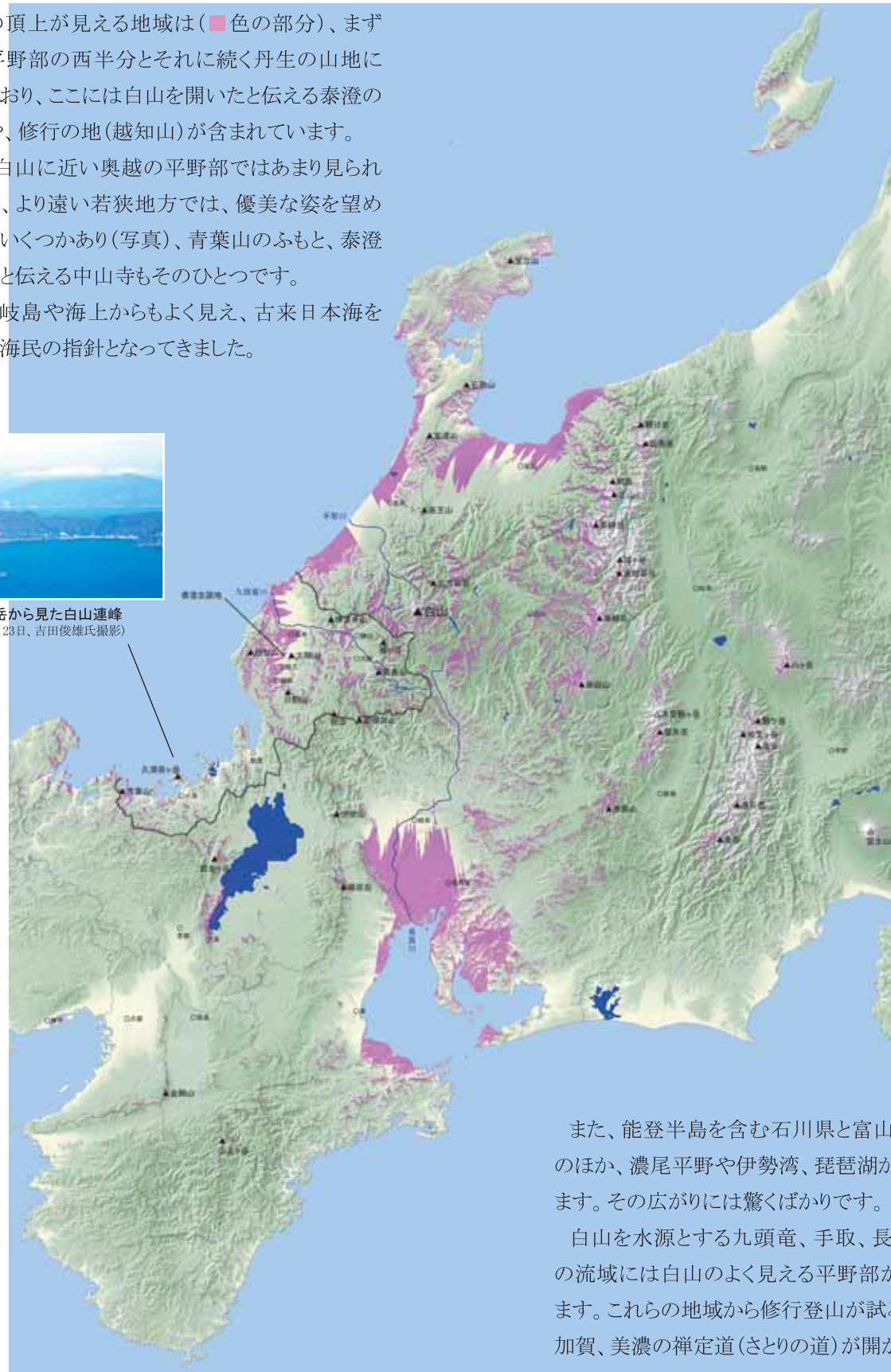
白山の頂上が見える地域は(■色の部分)、まず福井の平野部の西半分とそれに続く丹生の山地に広がっており、ここには白山を開いたと伝える泰澄の生誕地や、修行の地(越知山)が含まれています。

また、白山に近い奥越の平野部ではあまり見られませんが、より遠い若狭地方では、優美な姿を望める地点がいくつかあり(写真)、青葉山のふもと、泰澄が開いたと伝える中山寺もそのひとつです。

遠く隠岐島や海上からもよく見え、古来日本海を航海する海民の指針となってきました。



■ 久須夜ヶ岳から見た白山連峰
(2002年11月23日、吉田俊雄氏撮影)



また、能登半島を含む石川県と富山県の平野部のほか、濃尾平野や伊勢湾、琵琶湖からもよく見えます。その広がりには驚くばかりです。

白山を水源とする九頭竜、手取、長良の各河川の流域には白山のよく見える平野部が広がっています。これらの地域から修行登山が試みられ、越前、加賀、美濃の禅定道(さとの道)が開かれたのです。

地図作製には国土地理院の数値地図(CD-ROM版)、地図ソフト「カシミール3D」を利用した。

白山参詣のなりたち

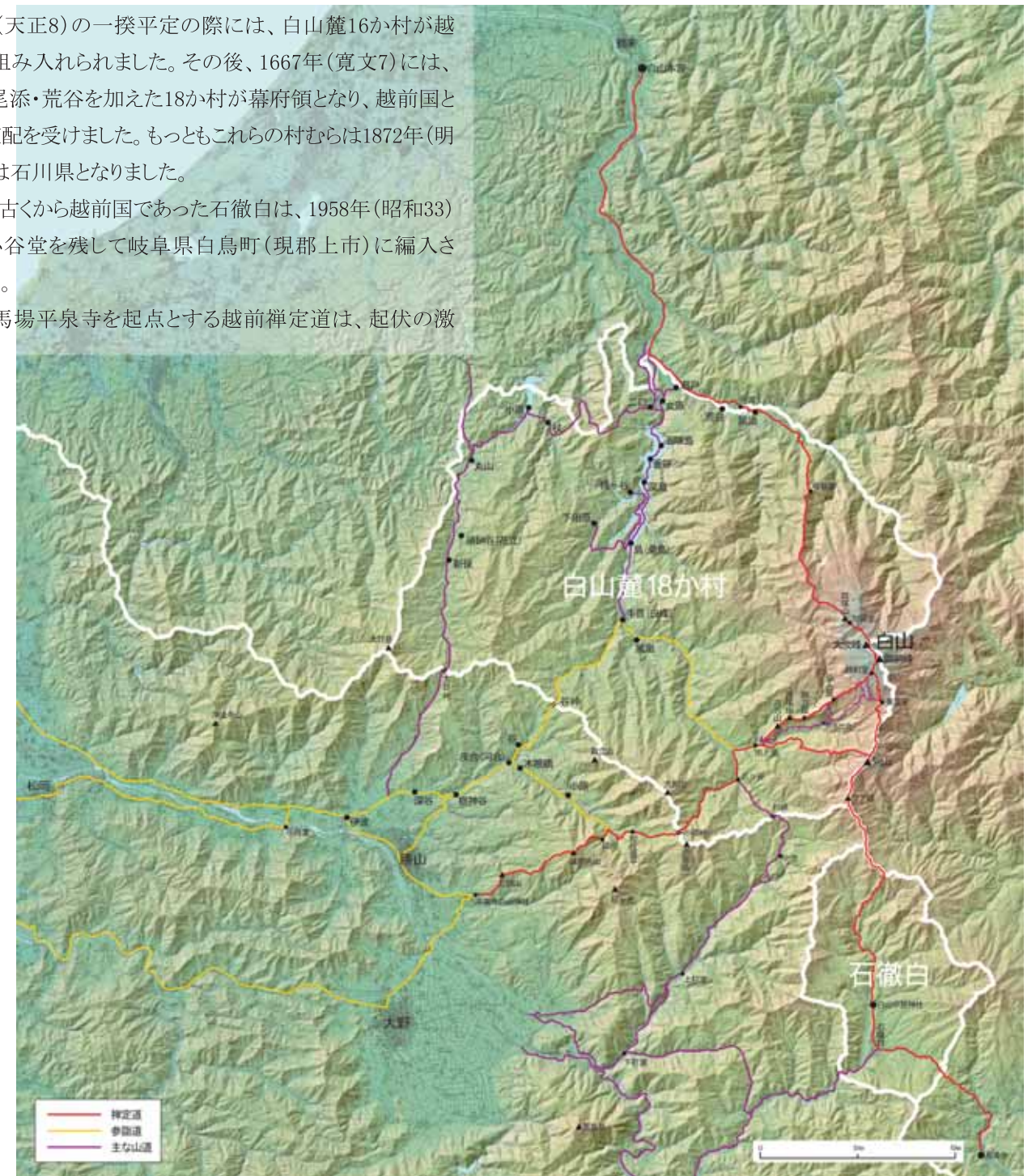
歴史的にみると、泰澄を共通の開創者として、越前、加賀、美濃から、それぞれ頂上への禅定道が開かれ、白山麓の人々は時には対立しながらも、白山信仰の世界を形成していきました。

戦国末期、この地域の一向宗徒は国境を越えて結びつき、平泉寺を焼き払うなど大きな力をもっていました。このため、1580年(天正8)の一揆平定の際には、白山麓16か村が越前国に組み入れられました。その後、1667年(寛文7)には、新たに尾添・荒谷を加えた18か村が幕府領となり、越前国としての支配を受けました。もともとこれらの村むらは1872年(明治5)には石川県となりました。

また、古くから越前国であった石徹白は、1958年(昭和33)三面・小谷堂を残して岐阜県白鳥町(現郡上市)に編入されました。

越前馬場平泉寺を起点とする越前禅定道は、起伏の激

しい道でした。このため、平泉寺が往時の勢いを失った近世には、白山参詣、あるいは湯治の客は、難儀な本道を避けて、谷峠越えの道をとるようになりました。こうして牛首から手取川の溪谷を遡って本道と合流、市ノ瀬の温泉にいたる道が一般的となりました。この他に、皮合(河合)から小原經由で本道に合流、小原峠を越える道をとる場合もありました。





越前国絵図に 描かれた白山

この絵図は1685年(貞享2)、幕命により福井藩だけに作成が命じられた国絵図の控で、翌年の25万石への減封と関係があるとされます。作成にあたって、各村よりの上申をまとめた「越前地理指南」(松平文庫)などが残されており、ともに「国絵図」「絵図記」として後の地誌「越前国名蹟考」や「続白山紀行」などに引用されています。

松平文庫には、ほかに、慶長、正保、元禄、天保などの各年間に作成された国絵図がありますが、それらと比べても本図は白山麓周辺の描写に優れています。

全容が白く描かれた右ページ中央の白山には、南(図下)より別山、御前峰、大汝峰に鎮座する三所権現が記され、越前、美濃の禅定道が朱線で、また室堂などの建物も丁寧に描かれています。加賀側は室堂のみで禅定道は描かれていません。起点であった白山麓尾添村の越前側編入を意識しているともいえます。

谷峠越えに牛首にいたる道はもとより、今では廃道となっている大日峠越えに新保にいたる道や、杉峠越えに上打波(小池)に出る道が描かれており、白山麓の村むらの密接な繋がりを示しています。

また、これら谷あいの道に設けられた橋ごとに、幅、高さが記されていますが、その数字からは険阻で危険な通路のようすが伝わってきます。



■ 越前国之図(部分) 1685年(貞享2)
松平文庫 福井県立図書館保管

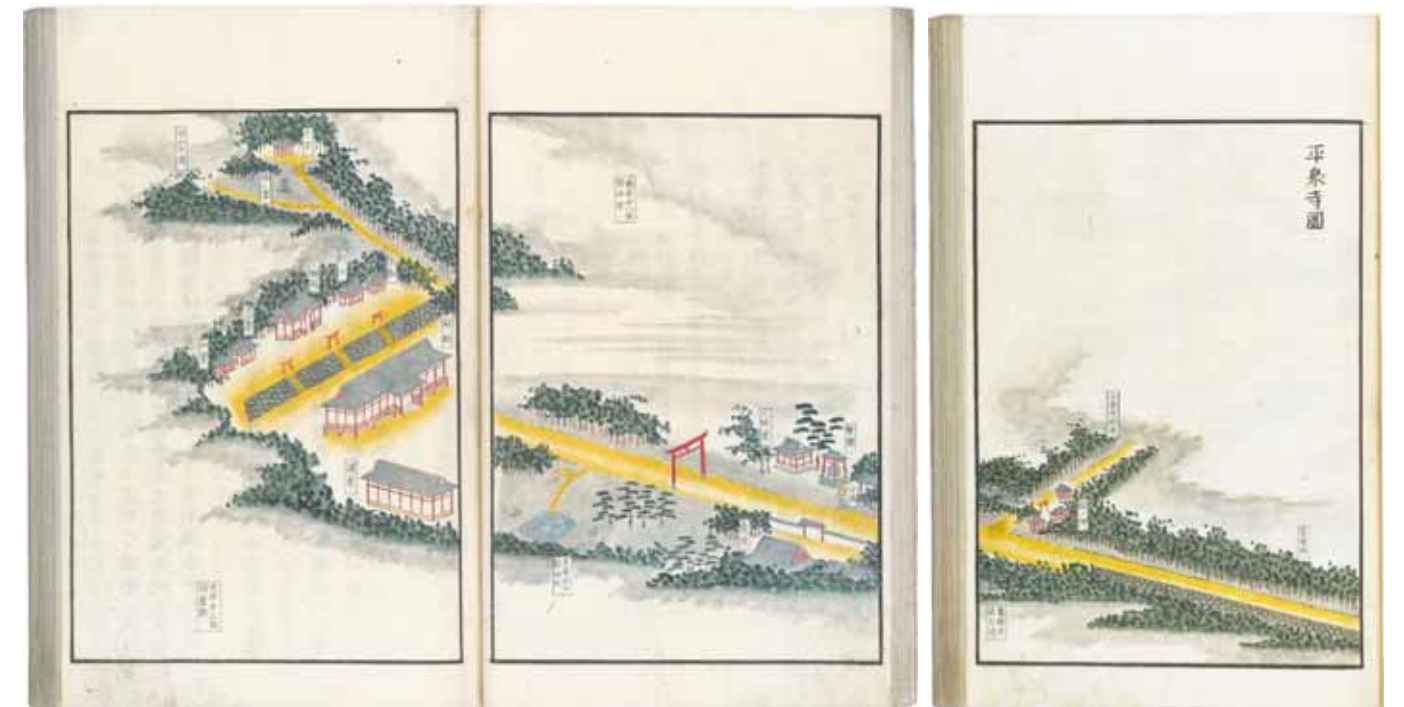
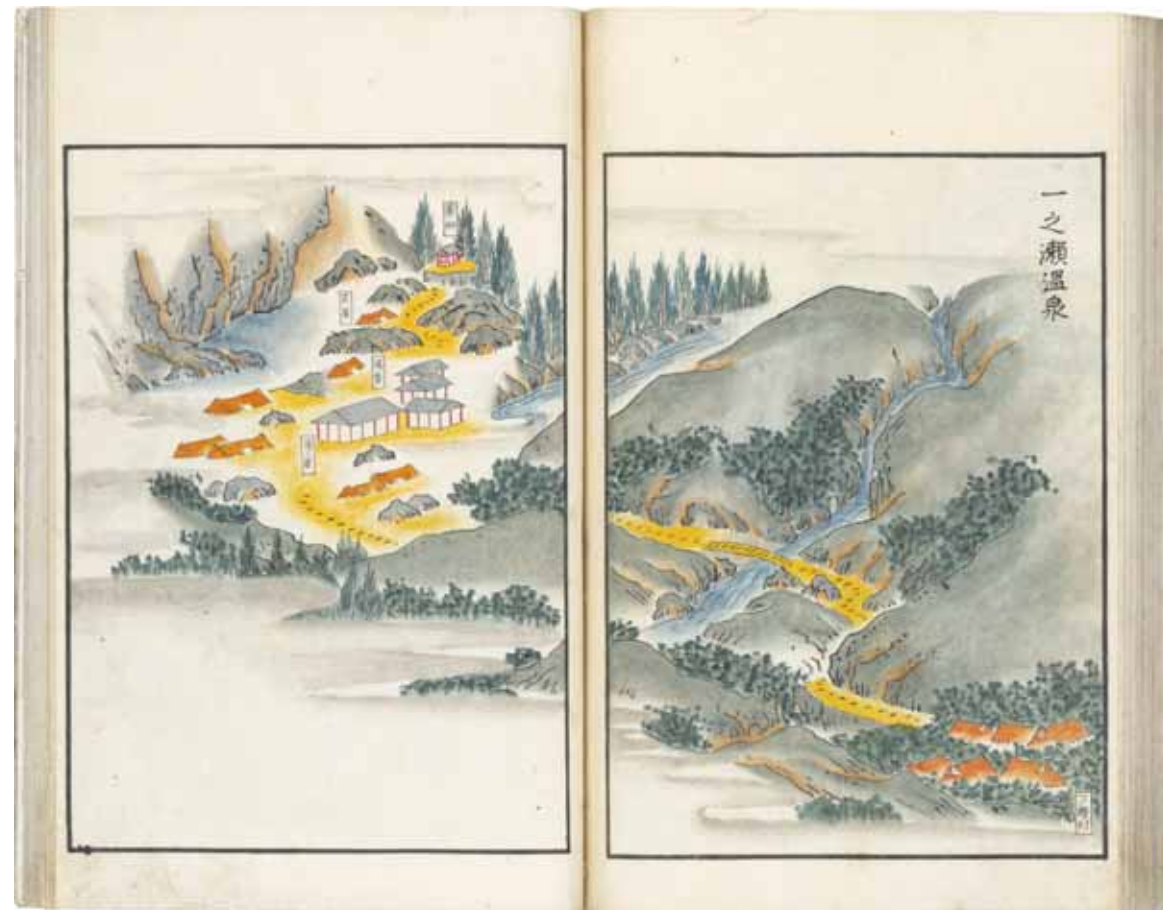
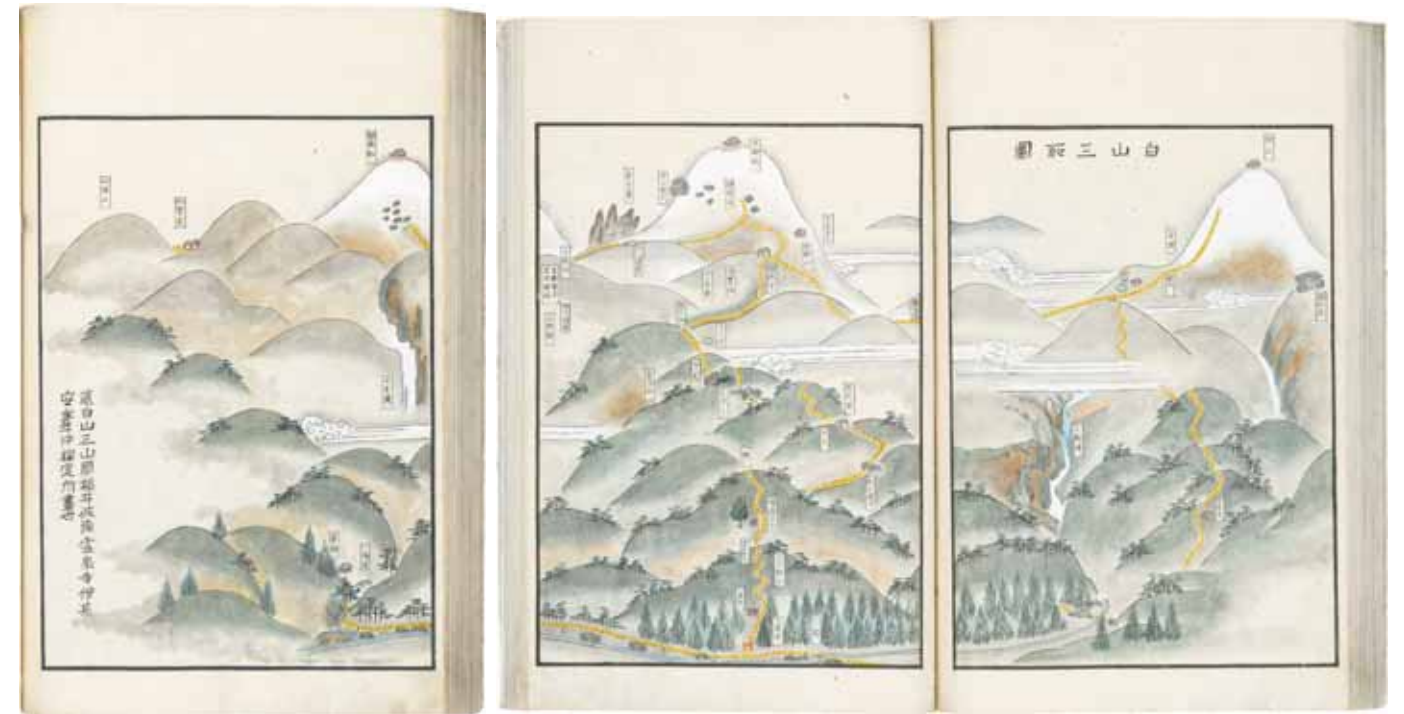


「白山紀行」の広がり

福井藩士井上翼章が著した「越前国名蹟考」(1815年)では、白山麓の村むらの解説に「白山紀行」がたびたび引用されています。これは17世紀後半の福井藩儒官、野路汝謙が「勝山より牛首通三山巡礼し、別山より石徹白へ下」った旅を記したものとされていますが、残念ながらこの紀行は現在に伝えられていません。

1829年(文政12)には、十辺舎一九の晩年のロングセラーとなった『方言修行金草鞋』(全26編)の第19編として「越前のかたより詣たる」^{むだしゆぎょうかねのわらじ}「白山参詣」の巻が刊行されました。このシリーズで、一九は、様々な紀行を参照しながら、虚構性のある滑稽話から実用性の高い道中記的な作品へとその作風を変化させていったとされます(中山尚夫『文学論藻』76)。

一九没後の1834年(天保5)まで出版され続けたこの『金草鞋』シリーズの読者層の広がり、近來白山禅定之人多く一之瀬入湯の人も次第に繁昌(「続白山紀行」という白山麓風嵐の村人の言葉をあわせてみると、19世紀に入った頃には、白山参詣・市ノ瀬湯治に訪れる人びとは確実に増えていたといつてよいでしょう。ここで取りあげる「白山全上記」(p.8~p.9参照)「続白山紀行」(p.10~p.11参照)が、これも現在では知ることのできない「菊谿子(山田氏)ノ紀行」「渡辺君祐尚の筆記」(渡辺祐尚は福井藩士)を引用していることから、この時代には多くの白山登山の紀行が知られていたことがわかり、白山参詣とその紀行の広がりが推測されます。



■ 井上翼章「越前国名蹟考」1815年(文化12)
松平文庫 福井県立図書館保管

「白山全上記」の反響

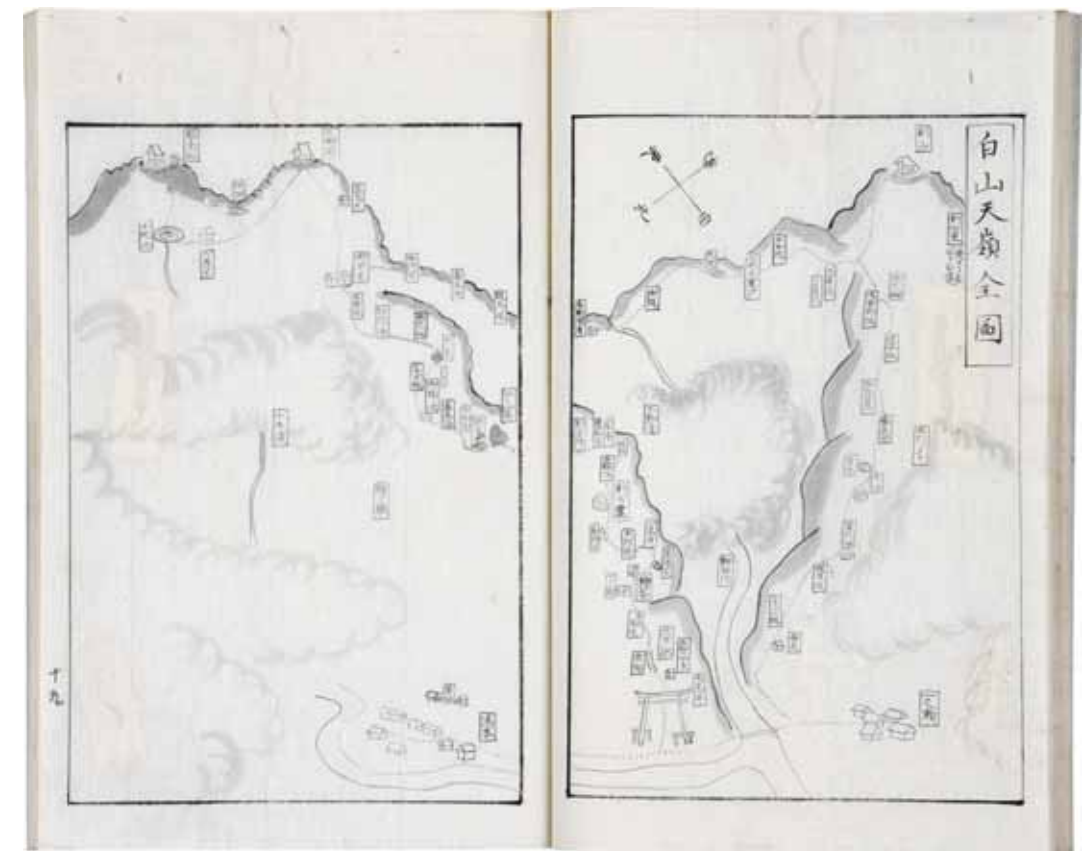
「白山全上記」(西尾市岩瀬文庫所蔵)は、福井藩士の加賀成教(?-1846)が1830年(文政13)に友人とともに白山に登った記録です。携行すべき防寒具や雨具、食料、登山に適した時期(6月土用中から中元まで)の記述にはじまり、出発の7月12日から24日まで、日ごとにポイントとなる分岐点の道標や塚、史跡や名所・難所が簡略に紹介され、各ポイント間のおよその里程、宿料や導者の雇賃などについてもていねいに書留められています。

全体としては、加賀自身が「附言」で述べているとおり、後年の登山者に役立つような実用的な内容となっています。そのなかで、途中立ち寄った勝山の知人宅で市ノ瀬出身者が留意事項を書いてくれたこと、谷村では浪人・無頼の者と怪しまれ、「老翁ノ室ナリテ怪キ小屋」に泊められたこと、市ノ瀬での盃蘭盆の古雅な「カンコ踊り」のようす、湯元の茶屋の妻が土産にくれた「竹米ノ団子」が小麦に似た味であったことなど、旅先での人間的なふれあいが感じられる記述も少なくありません。また加賀は絵心もあったようで、大杉峠(谷峠)からの眺望略図や難所であった風嵐大橋、白山麓湯元

の図など、軽妙な挿絵が書き加えられています。

「白山全上ハ士タル者一タビ行ベキ処ナリ」とするこの記録は、同僚の藩士たちを大いに触発したようで、これにならって白玉呉竹斎光美(武沢光美)「白山道の栞」(1831年)、高田保浄「続白山紀行」(1833年)があいついで執筆されています。

なお、ここで紹介した「白山全上記」には朱筆等で書込みが随所にみられます。これと「続白山紀行」が引用している内容を比較すると、これらが加賀自身による増補であることがわかります。



■ 加賀成教「白山全上記」1830年(文政13) 西尾市岩瀬文庫所蔵

二つの「続白山紀行」

「続白山紀行」は、高田保浄(1787-1847)が中根雪江に誘われて1833年(天保4)7月に白山に登った際の見聞がもとになっています。加賀成教の「白山全上記」を補注するために書かれたものでありながら、紀行というよりは多くの先行文献を引用した地誌に近いものになっています。

高田保浄は、「越前国名蹟考」の著者である井上翼章の次男で学問を好み、中根雪江や加賀成教とも親交が深かったとされます。「国絵図」「帰雁記」「名勝志」「城跡考」「白山紀行」などの旧記の引用は「越前国名蹟考」と重なるところが多く、「大人かつていふ(嘗て云)」として井上の考察が各所で引用され、同様に「成教いふ」として「白山全上記」もたびたび引用されています。また、これに対して時には「保浄いふ」として自説を述べたり、あるいは反論したりしています。全体として旧記を丁寧に追いながらも、自身の見聞で検証

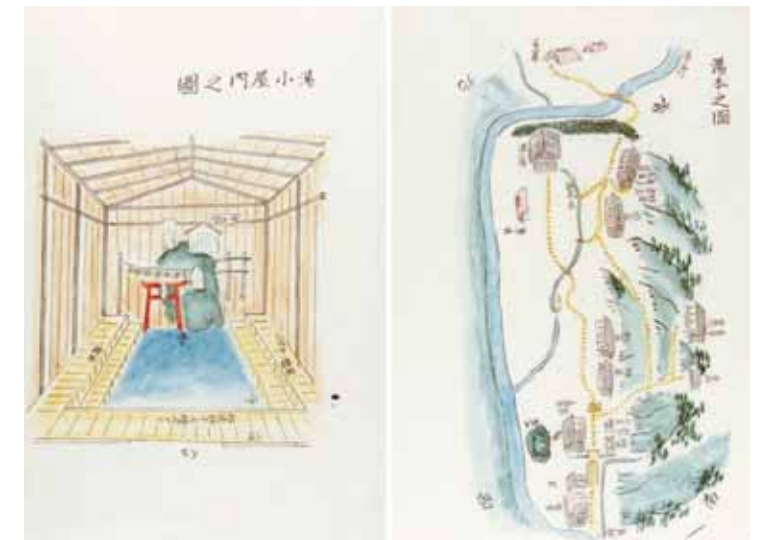
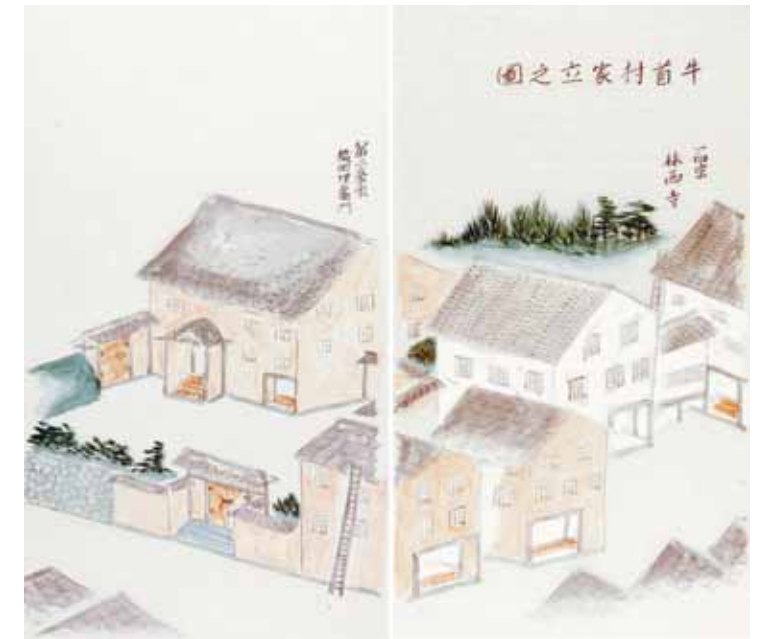
できないことには容易に納得せず、「附会の説決して信すへからず」という実証主義が貫かれているといえましょう。

ここで取り上げる二つの「続白山紀行」は、いずれも手書きの「写本」です。国文学研究資料館のものは、松平春嶽に関する資料編さんの一環として1922年(大正11)に福井市内の高田家に伝存していたものを影写しています。山内家のものは、劔神社禰宜であった上坂津右衛門が1941年(昭和16)に筆写したものですが、残念ながらもともとなった本はわかりません。二つの写本には内容には大きな違いはありませんが、かな遣いや表記に違いが多くみられることから、少なくとも別の本から写されたことが推測できます。

白山参詣とその紀行の広がりを見ると、県内にはここで紹介した以外の未発見の写本や白山紀行がまだまだ残されているかもしれません。



■ 高田保浄「続白山紀行」1833年(天保4)
国文学研究資料館所蔵



■ 高田保浄「続白山紀行」1833年(天保4)
山内秋郎家文書 福井県文書館所蔵

